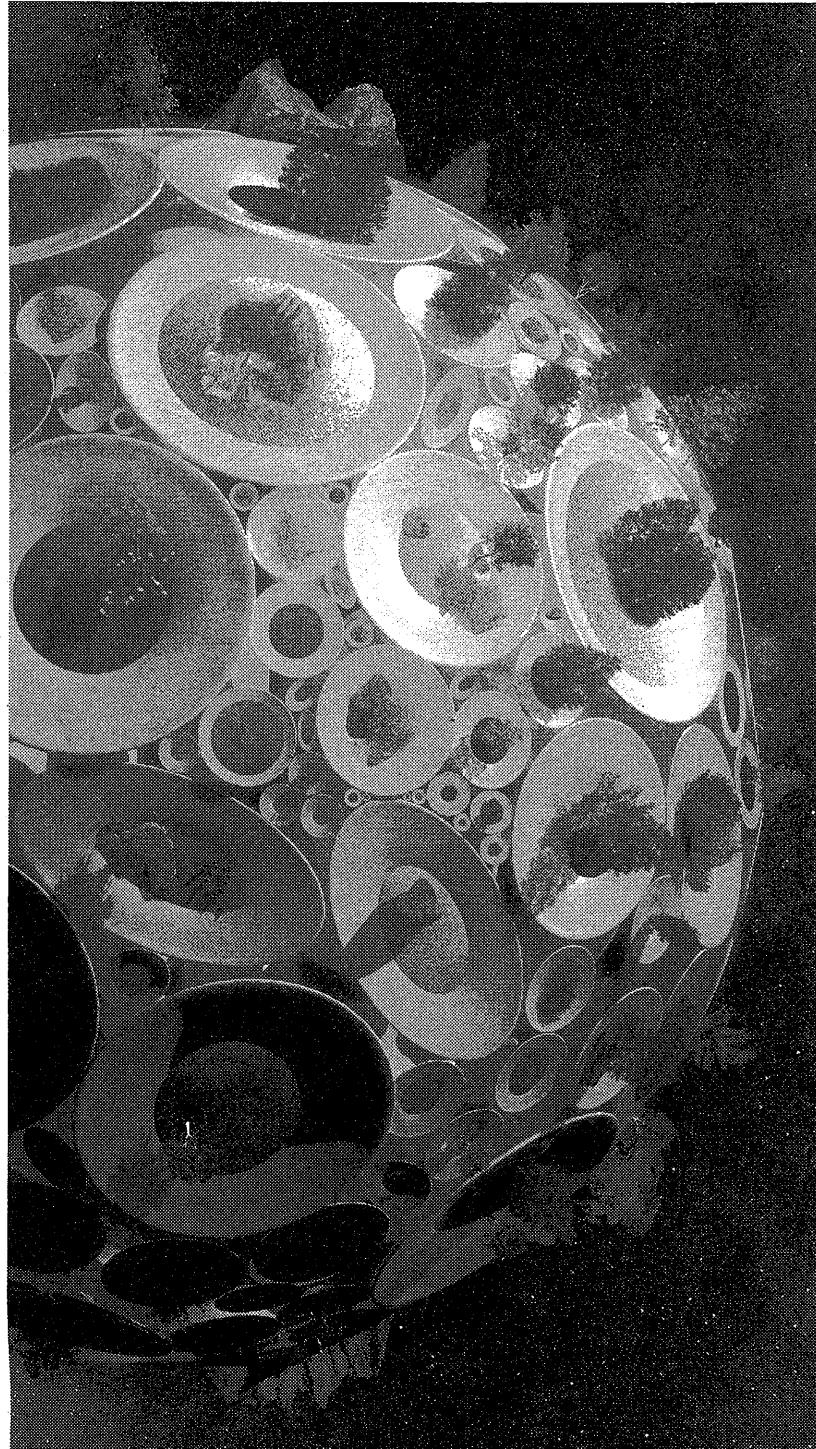


論壇時評

オピニオン

暗い未来

「考えないこと」こそ罪



「宇宙産天然地球の自然仕立てに四季折々の無添加物を添えて」

作家 高橋 源一良

3年前、モテルの女子大生を主人公として、田中康夫が書いたデビュー小説『なんとなく、クリスタル』は、本文とは別に442個の注をつけて、世間を騒然とさせた（①）。だが、その評価は、流行のファッショングや音楽ばかり目を向けた、軽薄な若者向けの作品、というものが大半だったと思う。わたしは、小説に潜む鋭い批評性に深い感銘を受け、そのことを書いた。もしかしたら、自分を「炯眼」と思いこんでいたのかもしれない。だが、実のところ、なにもわかつてはいなかつたのだ。

後年、作者は、自分がいちばん読んでもらいたかったところに誰も気づいてはくれなかつたと述懐している。

その部分では、小説の最後、本文が終わった後にある「出生力動向に関する特別委員会報告」と「五十五年版厚生白書」だ。そこでは、「将来人口の漸減化」と「高齢化した社会」の到来が不気味に予言されている。はかなくも美しい、都會の物語は、はるか未来の「暗闇」を前にして、より一層、輝きを増していくようだ、いまは思つ。



ないものに思えたからだ。一樂しき現在に酔いしれていたのは、登場人物ではなく、それを批判した「世間」の方だったのかもしれない。

中央公論12月号の特集は「壊死する地方都市」。増田寛也が加わった論文(②)と対談(③)を読んでいると、誰もが暗澹とした思いにかられるだろう。

いまや「人口減少」について指摘、「高齢化」を憂える風景は、どこでも見ることができる。けれど、差し迫った現実は、想像よりもずっと恐ろしい。

「地方が消滅する時代がやってくる。人口減少の大波は、まず地方の小規模自治体を襲い、その後、地方全体に急速に広がり、最後は凄まじい勢いで都市部を

も飲み込んでいく」(2)
地方から若者たちが流出してくるのが、は誰でも知っている。残された高齢者たちの絶対数もまた減り、そのことで地方の経済はさらに苦しくなり、若者たちの大都市への流入は加速する。だが、都市に若者たちを受け入れる能力は、もうない、「使い捨て」とされる若者たちには子どもを生み育てる余裕がないのである。
かくして「本来、田舎で子育てすべき人たちを吸い寄せて地方を消滅させるだけではなく、集まつた人たちに子どもを産ませず、結果的に国全体の人口をひたすら減少させていく」。そのことを増田は、「人口のブラックホール現象」と名づけた(3)。

むり」の、「Journalism」の「く
イ・トスピーチ」に関する大きな特集に
も、大切なことが書かれていたと感じ
た。

座談会(5)の出席者たちは、いわゆ
る「在特会」の「朝鮮人は死ね」といっ
たヘイトスピーチの主張に、かつてハン
ナ・アーレントがユダヤ人虐殺の中心人
物であったアイヒマンについて語ったた
く、「凡庸な悪」を見いだす。そして、深み
のない「凡庸な悪」であるからこそ、底



A black and white photograph showing a man from the chest up. He is wearing a dark suit jacket over a light-colored shirt and a dark tie. He is seated at a desk, looking down intently at a piece of paper he is holding with both hands. His expression is serious. The background is dark and appears to be an indoor setting, possibly an office or study. The lighting is dramatic, coming from the side to highlight his face and the paper.

たかはし・げんいちろう
1951年生まれ。明治学院大学教授。論壇時評の前任者・東浩紀氏らとの座談会で、「想像力とは遠くのものを近くにする」となどと語った。一部分撮影

①田中康夫
『なんとかく、クリスマスタル』(1980年発表、新装版の文庫が今月刊行)



②増田寛也＋
人口減少問
題研究会
「2040年、地
方消滅。『極
点社会』が 増田寛也氏
到来する」(中央公論12月号)

③藻谷浩介・増田寛也 対談
「やがて東京も収縮し、日本
は破綻する」(同)



増田寛也氏
中央公論12月号)
曾田寛也 対談
も収縮し、日本
(同)
農村は、企業と
か」(季刊地域

有田芳生氏
立てる『凡庸な
どう向き合うべ

人物の方の地(2)が暗くも見えた現る。も見えた現る。も見えた現る。

地方から若者たちが流出していよいよは誰でも知っている。残された高齢者の経済はさらに苦しくなり、若者たちの大都市への流入は加速する。だが、都市に若者たちを受け入れる能力は、もうなく、「使い捨てる」られる若者たちには子どもを生み育てる余裕がないのである。

かくして「本来、田舎で子育てすべき人たちを吸い寄せて地方を消滅させるだけではなく、集まつた人たちに子どもを産ませず、結果的に国全体の人口をひたすら減少させていく」。そのことを増田は、「人口のブラックホール現象」と名づけた(3)。

推計によれば、100年後、この国の人口は3分の1になり、高齢人口は40%を超える(2)。いや、それすら希望的な数字なのかもしれないのだが。

どうすればいいのか。増田との対話で藻谷浩介は、地方に「去る」若者にかなかな希望を託して、こういふ。

「私には二人の息子がいるのですが、大学を出て大企業に入つて残業続き、という人生を歩んでほしくはない。子孫も残せず、消費されるだけの一生よりも、田舎に行って年収二〇〇万円ぐらいで農業をやつていけるほうが、よほど幸せだと思うのです」(3)

消滅の危機に瀕する地方も、手をこまねいでいるわけではない。わたしの愛読している「季刊地域」は、追い詰められた農民たちが、政府に頼らず、自らの手で「防衛・反転」する姿を克明に描いている(4)。熊本県山都町にある水増集落では、「子どもたちが帰つてこられるから」を作るため、地元の小さな企業と組んでメガソーラー発電を始めようとしている。

置き去りにされた地方から、若者たちに向かって差し出される手があるのだ。